

今月のメッセージ(2018年6月)

## イエスのみ心の祭日



カトリック清水・草薙教会主任司祭 高橋慎一神父

私たちは、毎年、聖霊降臨後の第二主日以降の金曜日に、イエスのみ心の祭日を迎えます。

イエスの信心は、その源流を中世ヨーロッパにまで遡れるものです。イエスのみ心は、イエス様の心臓を意味すると同時に、特にイエス様の愛を意味しています。

「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。(ヨハネ19:34)」

十字架上のイエス様の脇腹<sup>あがな</sup>が槍で貫かれ、その刃先がイエス様の愛の心の象徴である心臓を貫通し、流れ出たその血は、世の贖いを示し、その水は、聖霊を意味するものとして、中世の人々の黙想の重要なテーマとなっていたのでした。

イエスのみ心の信心が現在まで続く、明確なスタイルを持つようになったのは、17世紀における、聖マルガリタ・マリア・アラコク修道女の神秘体験によるものです。

ベネディクト16世前教皇は、2006年にイエスのみ心についての公式書簡である「回勅「ハウリエティス・アクアス」発布50周年にあたって」を当時のイエズス会総長に送りました。この書簡の中で、ベネディクト16世は、「キリスト信者であることは、ある人格(イエス・キリスト)との出会いによって始まるのだということ」を強調するためでした。」と振り返えられ、主イエスの脇腹の傷と釘跡は、人々にとってキリストの愛を表す主要なしるしと象徴として人々の信仰を形作ってきたと教えていらっやいます。

「神の愛のもっとも深い表現は、キリストが十字架の上でご自分のいのちをわたしたちのために与えたことの内に見出されます。だから、わたしたちは、何よりもキリストの苦しみと死を仰ぎ見ることによって、わたしたちに対する神の限りない愛をいっそうはっきりと知ることができるのです。」

このように槍で刺し貫かれたイエス様のみ心への思いは、私たちを神の愛に心を開かせ、神との関係性をもつように招きます。

更に、ベネディクト16世は、同書簡の中で、次のように述べていらっやいます。

「イエス・キリストにおいて神の愛を「知ること」。イエス・キリストにしっかりと目を注ぎながらイエス・キリストを「経験すること」。ついにはイエス・キリストをほかの人に「あかしすること」に、イエスのみ心の信心は、私たちを導くのです。



「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。(第一ヨハネ3:16)」

イエス様のわき腹を、祈りの内面的な観想のうちに仰ぎ見て、神がまずわたしたちを愛してくださったことを思い、「互いに愛し合いなさい」というイエスの掟にわが身を寄せていくことができるのです。

(この書簡は、カトリック中央協議会のHPにて入手できます。)